

氏名（本籍）	ワ 和	ダ 田	レイジロウ 礼治郎	（広島県）
学位の種類	博	士	（美術）	
学位記番号	博	美	第 216 号	
学位授与年月日	平成 20 年	3 月	25 日	
学位論文等題目	〈作品〉VIA 〈論文〉庭の間			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	准教授	（美術学部）	林 武 史
（論文第 1 副査）	〃	〃	（ 〃 ）	井 村 彰
（作品第 1 副査）	〃	教 授	（ 〃 ）	山 本 正 道
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	深 井 隆

（論文内容の要旨）

## 内 と 外

本研究の対象となるのは、彫刻に関わる“内と外”の問題である。

われわれの周囲を取り巻くものは“環境”と呼ばれている。この聞きなれた言葉の含みは広大だ。家庭環境、社会環境、地球環境、どんどんその範囲は広がっていく。その中心はわれわれ自身である。ときに、樹木や動物など“人間”以外のものを中心に据えて周囲から眺めることがある。それはかつて石であったり、箱であったり、神であったりもした。ひとつの世界が、内として感じられたり、外として感じられたりすることに私は興味を抱いてきた。

## 彫刻とはなにか

まなざしは、瞬間と表面に限界づけられている。目の前に無いものは存在しないという認識が、瞬間的で表面的な今日の世界像の根源となっている。しかし、それは生きることの実感からほど遠いものだ。われわれがつくり手として環境に関わる時、目でみたり触れたりするだけでは把握しきれないことに関係する。それは瞬間的な作品の姿や、表面に関わることだけではなく、未知なる時間と空間に関わることだ。自らを賭してくぐり抜けるときに経験される“内にいる”という実感をみつめながら、彫刻の“内と外”の問題を問い、私の彫刻とはなにかを明確にしたい。

## 研究方法

従来、物質としての彫刻はその素材やかたち、技法から語られることが多いが、ここでは彫刻を環境に対する“いとなみ”として述べている。「自然の間」「人間の間」「庭の間」の3つについて、フィールドワークを主軸に彫刻研究を行い、次に関連の深い事象を取り上げ論じる構成をとった。

## 第 1 章 自然の間

北イタリア、リビーニョにて、私は滝のある景観を彫刻し、道をつくった。滝の発見からはじまった道行きは、展覧会という枠を通り越して継続された。現地を幾度も訪れることで自覚されたのは、人間とは関わりなく存在する時の姿であった。生涯を道に凝縮した壮烈ないとなみである巡礼について述べ、その条件が“失うこと”であることにふれる。また、浮世の外の間とされる露地について述べ、その特異性を“隠すこと”のうちにみる。私が行った道行きの過程を再考し、道は外の景観にあるものではな

く、内なる心への経路であることを、作品「VIA」で提示した。

## 第2章 人間の間

人が住むことから派生する壁、そして壁に囲まれた空間に着目し、ベルリン住宅ホーフで試みた彫刻計画について述べた。環境から彫刻の可能性を見いだすプロセスを明確にし、人の住む場所に芸術を計画することの意義と課題を検討した。私に大きな影響を与えた彫刻体験として、フィレンツェのラウレンツィアーナ図書館前室の大階段にふれる。多くの条件と制約を乗り越えて完成された大階段に、困難なしごとを長期的に実現するスタンスを学ぶ。また、ベルギー、ルーベン市で行った刑務所訪問から、まなざしの届かない場所について考察した。ホーフでの計画実現にむけて素材と構造の研究を行い、作品「HOF」を提示した。

## 第3章 庭の間

庭は“内側の経験”である。本章ではまず、見ることや触れることのできない“心”について洞察し、“環境”との接点を探った。また、私の記憶の中で強く印象に残る“人の姿”を手がかりとして、外からはとらえることができない“ベクトル”について述べた。またそれを「世界の内にありながら世界の外へと向かう」とした。これまでフィールドワークによって考察してきた環境の性質を再考し、俯瞰と仰ぎの両視点から、内と外の間を彫刻しようと努めた。天と地を貫く垂直のベクトルとして、作品「PASSAGE」を提示した。章末の「展望と課題」に、環境に対するこれからの姿勢を時間性から述べた。

## 結 論

本研究の過程で、私を制作に駆り立てるものは、境界によって生じる内と外の裂け目であることが明らかになった。つくり手にとって、環境とは凌駕すべきものであり、世界の“内”に世界の“外”をつくることである。生きられる時間と空間に関わる“間”私はそれを彫刻と呼ぶ。世界から独立した物としてではなく、世界に直接繋がり、あるいは対峙する“いとなみ”として、私は彫刻を“間をつくること”であると結論づける。